朝のこない夜はない

# 寛容の精神を養い、ほめ合ってゆきましょう

副山首　鈴木正修

御開山上人の御遺訓集『おりにふれて』の中に「ほめ合うくらし」という項目があります。

一、相手をほめてくらすようにしましょう。
二、相手をほめることは、自分をほめられるようにすることです。
三、子供達をほめるようにしましょう。

四、きっとよい子になって行きます。
五、わるい人でもきっとよい人になります。
六、ほめ合うことは、家庭を明るくすることです。
七、ほめ合うくらしを続けましょう。
八、商売繁昌、家庭平和の基となります。

老若男女を問わず誰でもほめられたいものです。それには御遺訓のように、まず相手の長所を見つけて相手からほめるようにしなければいけません。

実はこのほめ合うということは、なかなかに意味深いことなのです。

ではどのように意味深いのでしょうか。それは例えば、誰でも珍重し大切にする美しい宝石も、最初から美しかったのではありません。岩石の中に混じっている時は、そこらへんの石と同じです。それを見つけ出して磨き上げたればこそ、美しい光を放つようになるのです。

私たちの中にも仏性という宝石があります。もちろんこれを磨くのは菩薩行ですが、菩薩行を勧奨するのがほめることなのです。

私たちはともすれば、怠惰に流れやすく、邪念が起こりやすいものです。ですから、少しの善行でもお互いにこれを賞讃して良い方向に導き合うのがほめ合うことなのです。

それと、お互いに少々の短所・欠点には目をつぶる寛容の精神も大切かと思います。

このような心がけを親や教師、また上に立つ者が持つことは特に大事かと思います。

暴れん坊将軍として有名な徳川吉宗は、名君の誉れ高い人です。その吉宗に次のようなエピソードがあります。

ある日、吉宗は鷹狩りに出かけました。沿道には将軍さまを一目見ようと、大勢の人々が列をなしていました。吉宗はそれらの中に、老婆を背負った一人の若者がいるのに気付きました。家臣を遣わして事情を尋ねさせると、老婆は若者の母親で、病気で身動きができないとのことでした。しかし、冥土の土産に一目将軍さまを拝みたいというので、邪魔にならないように背負って拝ませてもらっている、と言うのでした。吉宗は感心し、若者に褒美を取

## 朝のこない夜はない（198）

らせました。

一年が過ぎて、吉宗がまた鷹狩りに出かけました。すると、今度は昨年とは明らかに違う男が老婆を背負って道端に立っていました。吉宗が家臣に尋ねさせると、村役人が眉をひそめて言います。

「あいつはこのあたりで大変評判の悪い男で、褒美が欲しいため、去年褒美を頂いた若者の真似をしているだけでございます。あんな奴に褒美をやってはいけません」

ところがこれを聞いた吉宗は、「善いことを真似ているのだからいいではないか」と言って、この男にも褒美を取らせました。

その後、この村では年寄りを大切にする者が増え、孝行者の多い村と評判になったそうです。八代将軍吉宗が幕府中興の名君とされる所以が、こんな話からも感じられる気がします。